

---

# ある男の物語

ガイハン・ボシ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ある男の物語

### 【Nコード】

N5759D

### 【作者名】

ガイハン・ボシ

### 【あらすじ】

「今からあなたに俺のくだらねえ人生を語ってやるよ。」そう言っ  
て彼は自分の恋愛譚を語りだした。遺言として……。その男の  
物語を語り継いで行く為、私は筆を取りここに記す。

## （前書き）

ここに記すは波乱万丈な男の生き様！  
とくにご覧あれ！

・・・まあ、楽しんで頂ければ幸いです。

「なあ、そのあんた。ちょっと俺の話に付き合わないか？いいじゃねえか。どうせ暇なんだろう。ここの払いは俺が持つからよ。」

恋愛物語の主人公って奴あ幸せ者だと思わないか？どんなに苦しい状況に追い込まれても、最後には必ず愛する者と結ばれるんだからよ。

けどよ、現実はそのなにかあない。そうだろう？

この世に、恋を实らせられる奴がどれほどいるってんだ？

愛する者に、心から愛された者がどれほどいるってんだ？

俺は26年と2ヶ月しか生きちゃいないが、3人の女を好きになった。だが俺の恋は物語のようにはいかなかったんだなあ。これが今からあんたに俺のくだらねえ人生を語ってやるよ。まあ、そんな顔しないで聞いてきなつて。しがない一兵士の遺言さ。この先の人生の参考にしな。

なんだってこの世は、どうしようもなく非情だからな。

まずは俺が15才の時の話だ。11年も前の話だな。その頃は俺も若かったんだぜ？考える事も、な。

それまでダチと馬鹿ばっかやってた俺も、一丁前に好いた女ができたんだ。身の程知らずと笑ってくれよ。好いた女は7つも年上の、貴族様の御子女だぜ。

どこで知り合ったかって？俺も落ち着きがなかったからな。仲間集めて馬鹿なことやってたのさ。貴族の屋敷に侵入して度胸試しとか、な。当然見つかりやただじゃすまねえ。そんなことして何が面白いんだか、今じゃわかんねえけどな。

で、その時にへまやつちまってよ。見張りに見つかった。ちまった。

闇雲に逃げ回った末に、気が付きや女の部屋に飛び込んでな。隠れ場所を探してたらきれいな声で呼ばれたんだ。誰だってな。そのときは、もう観念して罰を受けようか、それとも女を盾に逃げ延びようか考えてた。今にして思えば物騒なこと考えたもんだ。そしてらそいつは窓を開けて、言ったんだ。この木を降りれば簡単に逃げるってな。こうも言った。また今度お友達も連れて遊びに来ないか、って。そのときは何も言わずに逃げた。良家様の御子女殿は考えることがわからん、とか思いつつな。

これが最初の出会いさ。へんてこだろ？

その後、ちよつとしてから行ってみたんだ。何となく、暇つぶしにな。いや、違うか。ホントはちよつと気になってたんだ。あんな綺麗な声で話す女が、どんな顔してんのかな、ってな。あん時は部屋が暗くてよく見えなかったんだ。思えばその時既に魅かれてたのかもしれないねえな。

実際会ってみると、やっぱり綺麗な面してたな。そんな時気づかなかったが、俺は確実に一目惚れしてたね。話してみると、ますます魅かれていった。魅かれていつちまった。

俺は何度も、それこそ毎日会いに行つたよ。庶民のくだらねえ日常の話を、その女は楽しそうに聞くんだ。その女にとつては退屈しなくても、俺にとつては何よりも幸せな時間だった。ダチを連れてきてもいいって言われてたんだが、俺は結局最後まで連れて来なかったな。わかるだろ？連れてきたくなかったのさ。

逢ってから半年経った頃だ。その女は城に行くことになった。ほとんど屋敷に帰ってくることはないらしい。その時は理由なんて全く考えてなかった。愛しの女が手の届かないトコに行っちゃうんだ。

それどころじゃねえだろ？俺は、それはもう苦悩したさ。三日三晩悩んで、ようやくこの燃え上がる想いをぶつちやけようと決心した。ああ？大袈裟だって？そりや他人から見たら滑稽かもしれないが、俺はその時本気で悩んだんだよ！若かったしな。だがな。その時はも

う手遅れ。そいつはとつくに城に行っちゃってたのさ。間抜けだなあ。

諦めきれない俺は考えた末に、兵隊に志願することにした。志願兵としてなら俺みたいな平民でも城に入れるからだ。我ながら浅はかだったなあ。もう家族にも会えなくなるかもしれないのに、あの女に告るために俺の将来決めちゃったんだからな。

だが、ただの一兵士がそうそう城ん中をウロチョロできる訳がねえ。あの女もかなりの身分だったしな。だから俺は頑張った。それなりの身分を手に入れるために。戦場にだって率先して出たし、この手で幾人もの敵兵を手懸けた。そうして手を血に染めながら功績を挙げて、遂に王子直属の親衛隊にまで昇りつめた。

そして、あの女に再会した。ただ、最悪なことに再び会った女は王子の妻になっていた。笑えるだろ？俺はとんだピエロだったのさ。その時、俺の世界は崩壊した。狂っちゃったのさ。氣付けば俺は、その手に携えてた槍で王子を刺してた。躊躇いは、なかった。その場は、それはもう大騒ぎさ。衛兵に取り押さえられる中、俺は極めて冷静に考えてた。急所を外しちゃったな、と。ちゃんと殺してやらなきゃ駄目だな、と考えて俺は夜中、牢を脱走した。城のことは知り尽くしてるからな。

王子の寝室に侵入して滅多刺しにしてやろうと思ってた。正気の沙汰じゃねえよな。その時の俺はどうかしちゃってたんだ。だが、都合の悪いことに狂気の元凶もそこにいた。元凶は俺の前に立ち塞がって、どうしてこんなことをするのか、もう止めてくれ、と悲しい表情で訴えてきた。その顔を見たときに、俺はハッと気づいた。自分のしよとしてしていることに。この顔をこんな悲しみに染めたのは誰だ？俺は目の前の女に、こんな表情を向けて欲しかったのか？そう考えると、俺の狂気は霧散した。と同時に、この女の前から消えようと思った。互いのためにも、そのほうがいいと思ったんだ。ただ最後に、例え傷つけることになるとしても、俺の気持ちは伝えたかった。俺は女にゆっくり近づいて、『俺はあんたが好きだ。』そ

う囁いて、槍の柄で当身をくれて気絶させた。

そのまま隣国、この国に亡命して来たんだ。王子が憎くないと言え  
ば嘘になるし、そのまま残れば間違いなく処刑されるしな。

亡命は極めて簡単だった。他国の城の構造は熟知してるし、王子に  
重症を負わせたことで疑われることもなかった。直ぐに一部隊の隊  
長を任されたよ。18歳の時だ。

これが初恋の結末さ。どうだい？酷いもんだろう？だがな、大半の  
奴は恋に敗れてるし、そういう奴はいつも辛い思いをするものさ。  
振った振られたは互いに辛いけどな。あんたも経験あるだろ？まあ  
俺のは特に酷いかな。自業自得ってやつだ。

2度目の恋は俺が20の時だ。

その頃には俺も初恋のことは忘れていた。いや、戦場に忙殺されて  
考える暇もなかっただけか。何しろ俺は率先して前線に立ってたか  
らな。お陰で俺の部隊は名誉と死傷者が絶えなかった。

そんな俺の部隊の副隊長は女だてらに突撃兵でな。ある日そいつに  
言われたんだよ。俺はまるで、死にたがってるように戦ってるそう  
だ。何だか心を見透かされたようで面白くなかったし、そこまで思  
いつめてるつもりはなかったんだが、そいつはしつこく絡んでくる  
んだよ。正直ウンザリしてたぜ……。

何時だったか、俺の母国と戦うことがあった。しかも何の因果か、  
俺の所属してた部隊とぶつかっちゃってな。戦いながら散々罵声を  
浴びたよ。そいつらからしたら、俺は裏切り者だからな。戦場で死  
ぬなら、こいつらに殺されるのがいいかもな。そう考え始めた時、  
あいつが言ってた事もあながち間違いじゃなかったなって思い知っ

た。それに、俺にはそいつらを殺すことなんて出来なかった。だから、槍を捨てて無防備な姿を晒したんだよ。かつての仲間には殺されるために、な。俺に怨みの籠った一撃が振り下ろされた。

その一撃は・・・結局俺には当たらなかった。副隊長が俺を庇ったんだ。きれいな紅い血が俺の視界を覆った瞬間、俺は再び槍を手に取った。その女を、俺が愛する女をこれ以上傷つけない為に。もう、俺のために大切な存在が傷つくのは嫌だったんだ。敵がかつての仲間だろうが、そして俺が裏切り者だろうが関係ない。俺は今を生きている。だから過去は関係ねえ。そう吹っ切れて槍を振るい、俺は『過去』をすべて殺した。

すべて殺し終えた時には、女はすでに虫の息だった。なんでこんなことをして聞けば、俺に理由のないまま戦場で死なれるのが許せなかったらしい。はつきり言っただけ俺は強い。それほどの奴が腑抜けのまま、戦場で倒れるのは許さない。戦場で死ぬなら志しを持って、と言われた。

女の戦う理由は、婚約者の仇討ちだった。昔、戦争に巻き込まれ死んじまったらしい。だが、女が兵士になった頃には仇の国はすでに滅んでいた。だから、戦争そのものを仇に今まで戦ってきた。一つでも多くの戦場を無くすために。

だったらこんな所で死ぬなって言っただけだが、後は俺が仇を討ってくれるそうさ。まったく、トンだ業を背負っちゃったもんだ。その男に会ったこともねえのによ。でも、悪い気はしなかったな。

そうして俺の想ってる女は、かつての婚約者のことを想いながら、逝っちゃった。

そりゃあ悲しいさ。結局俺の想いは伝えられなかったしな。でも、そのことを後悔しちゃいねえ。何も告げないほうがいい時だってあるんだ。



・・・もう時間がねえな。俺の最後の恋の相手はこの国のお姫様だ。そんな身分でありながら、国民全員のことを考えていらっしやる。危険もかえりみず、こんな国境近くの街にまで民を励ましに来てる。そのことが外に漏れりゃ、敵の大群が押し寄せるだろうなあ。この街みたい。あのお方のことだ。そのことに責任感じて、俺たち足止め部隊に混じってここに残ろうとするだろうなあ。

そうだろう？お姫様。何してんだ？こんなところで。ここはあんたのいる所じゃない。今は皆最後の宴で盛り上がってるが、ここはもうすぐ5000の敵兵で埋め尽くされる。確かに、こんなことになったのはあんたが原因かもしれねえ。だがな、ここにいる誰も皆あんたを恨んじやいねえよ。

・・・いいことを教えてやろうか。ここにいる誰もが、命令されてここにいるんじゃない。皆それぞれ大事な者のためにここにいるんだ。子供のため、親のため、家族のため、男のため、女のため、そして俺はあんたのために、それぞれ皆守る者のために戦い、散っていくんだ。こんな恋愛物語だって、ありだろ？

だから・・・走れ！まだ最後の船が残ってる！あんたのために出港が遅れるんだ。それで船が逃げ遅れたら、俺達やあんたを許さねえ！守るためにここににいるのに、何も守れねえままに俺達を死なすつもりか！だから・・・行ってくれ！

「・・・わかりました。でもひとつだけ、言わせてください。

私は・・・あなたのことが、気になって仕方なくなってしまうした。あなたのことを想うと、きつと夜も眠れない。あなたが死んでしまえば、私はきつと深く傷つくでしょう。

だから、生きて帰ってきなさい。そして、この私の気持ちに・・・責任をとりなさい。

それでは、また後日に」

そうして、姫は去っていく・・・。

「・・・ははっ！こりや死ねなくなっちまったな。一国の姫様がそんなに顔赤くして・・・。なんか罰があたるかもな！

それじゃ俺たちも、戦闘準備開始だ！」

丘の下は、地も見えない程の兵隊で埋め尽くされている・・・。

「・・・かゝ、こりや凄いな。5000どころか7000はいるじやねえか。対してこちらは・・・150いればいいところか。上等上等。何せ俺がいるからな。

よし！行くか！俺の物語の終幕、派手に決めるぜ！せいぜい俺の引き立て役になつてくれよ！」

そして、長い長い戦いの夜は始まる・・・。

（後書き）

彼の物語はいかがでしたか？

ほとんどが一人の人物の言葉という変わった作品ですが・・・。  
読んでくださり、ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5759d/>

---

ある男の物語

2011年1月3日23時12分発行